

内感のパラドックス

——自己認識の問題と超越論的哲学——

円谷裕二

序

本稿では、『純粹理性批判』（以下『批判』と略す）における内感（innerer Sinn）ないし内感現象の多義性の考察を通して、カントが「内感のパラドックス」と呼んだ事態の内実を明らかにしたい。そのための一つの方法論的通路として、内感現象としての自己についての認識の問題に焦点を合わせ、その問題の背景および意味について考察する。

内感という用語はカントにおいてさまざまな意味合いで用いられるが、それらの意味の相違は、当然のことながら、それらがどのような脈絡ないし次元において問題とされるのかに依じて異なってくる。それゆえ、まず第一節では、内感の意味の解明のために、内感を、それと対をなす外感との比較から追究してみることにする。次に第二節では、心理学（経験的心理学および合理的心理学）と超越論的哲学とを比較しながら、両者における内感現象の意味の相違がそれぞれの学的態度のどのような差異に基づくものなのかという点について論究する。第三節では、超越論的哲学そのものにおける内感の意味を、内感の触発という思想を導きの糸として考察する。最後に第四節において、それまでの議論を踏まえながら内感のパラドックスという事態の本来の意味の所在を明らかにする。結局のところ、内感のパラドックスとは、カント哲学の根本態度、すなわち超越論的観念論が同時に経験的実在論でもあるという態度に帰着すると論定するのが、本稿の目的である。

第一節

『批判』第二版の「演繹論」の或る箇所において、カントは、現象としての自己の認識の可能性の問題と、外的対象の認識の可能性の問題とを、パラレルに論じている。すなわち、外的対象の認識が可能であるためには、二つの条件が必要であり、一つは、対象一般を思惟するところのカテゴリーであり、他方は、対象についての感性的直観である。カントの認識論によれば、直観（この場合は外的直観）において与えられた多様がカテゴリーに従って綜合統一されることによって、外的対象の認識が可能になる。このような外的対象の認識とパラレルに、現象的自己の認識の可能性が説明されている。「われわれ自身を認識するためには、おのおのの可能的直観の多様を統覚の統一にもたらすところの思惟の作用のほかに、さらにこの多様がそれを介して与えられるところの一定の直観様式が必要である」（B157）。なおここで問題になっている自己認識とは、決して超越論的統覚としての自己についての認識ではないことに留意しなければならない。なぜならば、自己認識は「あるがままの自己についての認識ではなく、単に自我が自分自身に現象するがままの自己についての認識にすぎず」（B158）、そのような現象的自己は、自己自体とか思惟の働きそのものではなく、あく

までも内的な感性的直観において与えられなければならないからである。

このように現象的自己の認識を、外的対象の認識とパラレルに論じる時には、またそこにおいてさまざまな要素がパラレルに指定されることにもなる。例えば、「超越論的感性論」(以下「感性論」と略す)の中での内感 (innerer Sinn) と外感 (äußerer Sinn) や、内感形式としての時間と外感形式としての空間、さらには内的現象と外的現象などのパラレリズムがそれである。「われわれは、(心 (Gemüt) の固有性の一つとしての) 外感を介して対象をわれわれの外にあるものとして表象する、つまりこれらの対象をことごとく空間において表象する。……内感¹は、心がそれを介して自分自身や自分の内的状態を直観するものである。確かに内感¹は、一つの客観としての魂 (Seele) そのものについてのどんな直観をも与えるわけではないが、しかしながら一定の形式があり、その形式の下でのみ内的状態の直観が可能になる。それゆえ、内的規定に属するものはすべて時間関係において表象されるのである」(B37)。内感と外感²は、感官 (Sinn) という言葉が示すように受容的能力であり、また内感形式としての時間と外感形式としての空間は、受容性³の能力としての感性の形式である。

「感性論」におけるこれらのパラレリズムとの関連から、触発の問題に関してもパラレルな考え方が成り立つ。「それゆえわれわれは、われわれが外感を介して客観を認識するのはわれわれが外的に触発されるかぎりにおいてであるということ⁴を、外感に関して認めるならば、またわれわれは内感に関して、われわれはわれわれ自身によって内的に触発されるがままにのみ、われわれ自身を内感を通して直観するということ⁵を認めなければならない」(B156)。その際、外感の触発の根拠として超越論的对象という可想的存在が想定できるとすれば、同様にまた、内感を触発するものとして、超越論的自己なるものを想定することが可能であろう。ただしこれらの可想的存在は、未知なる「何か或るもの (Etwas)」(Vgl. A 358f.) であるかぎり、それらが同一のものか否かについてわれわれ人間が積極的に答えることはできない。「外的現象の根底にも、また同様に内的直観の根底にも存するところの超越論的客観は、物質 (Materie) でもなくまた思惟する存在者それ自体でもなく、諸現象の根拠でありわれわれには未知のものである」(A380)。われわれ人間に言えることは、外的触発によって空間形式の下には外的現象が、そしてまた同様に、内的触発によって時間形式の下には内的現象としての自己⁶が与えられるという事実だけである。なおあらかじめ注意しておかなければならないことは、ここでの内的触発とは、あくまで外的触発とパラレルに考えられるかぎりでの触発のことであって、本稿第三節で述べるところの、構想力の超越論的総合ないし超越論的統覚による内感形式に対する触発のことではない。

さて以上のことから、内感の対象としての自己の認識と外的対象の認識とのパラレリズムに定位しながら、内感と外感、時間と空間、内感の触発と外感の触発などについてもパラレルな考え方を看取することができるのであるが、しかしながら、実のところ、カントの超越論的哲学の展開過程においてはこのようなパラレリズムを最後まで維持しつづけることが困難になってくる。というのも、経験一般の構造の究明を課題とする超越論的哲学においては、上述のパラレリズムは、次第に解消されうべきところの暫定的ないしは方法論的なものにすぎないことが示されてくるからである。このことは例えば、空間は、外的直観の形式として外的現象の所与の可能性に限定されるのに対して、時間は、外的現象および内的現

象の、つまりは現象一般の可能性の形式であることによって内的現象のみならずまた外的現象の制約でもあるということから明らかであろう。「時間は、あらゆる現象一般のアプリオリな制約である。しかも時間は、内的現象（われわれの魂）の直接的制約であり、まさにこのことによって間接的に外的現象の制約でもある」（B50）。内感が外感よりも、また内感形式としての時間が外感形式としての空間よりも包括的で普遍的なものとなされるかぎり、外感と内感や、空間と時間の間にパラレリスムスを保持することは困難になる。

それでは超越論的哲学において俎上に載せられる内感とは、いかなる意味内容をもつものなのであろうか。また、「演繹論」における現象的自己の認識ということで、カントは何を考えているのであろうか。「演繹論」での自己認識とは、経験的心理学的意味での自己認識のことではなく、超越論的哲学において問題となるかぎりでの内感現象の認識を意味するのであるが、それではそもそも、心理学と超越論的哲学とはその方法論的態度においてどのように異なるのであろうか。また両者の相違から内感ないし現象的自己についてのどのような相違が招来されるのであろうか。次節ではこれらの問題について考察してみることにしよう。

第二節

心理学とはカントにとって、内感の対象としての魂についてその性質を規定する認識のことである。他方、超越論的哲学は、心理学のように対象（魂）についての直接的な認識ではなく、「対象についてのわれわれの認識の仕方」（B25）に関わるという周知の「超越論的」という術語の定義から窺知しうるように、認識一般が成立するための可能性の根拠を認識主観の形式的側面において企投しようとする認識のことである。前者は、対象の探求方法が「経験的心理学（empirische Seelenlehre）」（B400）のようにアポステリオリであれまた「合理的心理学（rationale Seelenlehre）」（B400）のようにアプリオリであれ、いずれにせよ魂という対象に直接的に関わりながらそれについての認識を獲得しようという認識態度を採る。それに対して後者は、対象の認識に直接に向かうのではなく、対象の認識を一般的に成立させる可能性の制約とは何であるのかという問題圏域の中を動いている。したがって心理学と超越論的哲学とは、認識主観と認識対象との関係において、その探求の態度を異にしているわけである。

魂という対象について、アプリオリな総合判断を独断的に得ようとする合理的認識であれ、あるいは、内省という経験的観察による経験的認識であれ、これらの認識態度に共通する特徴は、魂の存在に対する素朴な前提に存すると言えよう。他方、超越論的哲学の場合、認識一般の可能性の根拠を主観のアプリオリな形式に求めるかぎりでは主観に直接関わるとは言えるが、その際に、認識対象の存在に関してはそれを素朴に信念するということはない。それゆえ、合理的心理学と経験的心理学は、魂の存在に対する素朴な信憑という共通の態度を採りながら認識対象に直接立ち向かうという点で、明らかに「超越論的」態度からは区別される。心理学の認識態度は、認識対象の存在を認識主観から独立なものとして前提するという点では素朴實在論に立脚しており、その意味においてそれを、「超越論的」態度とは区別して、「経験的」態度と呼ぶことができる⁽¹⁾。ただし合理的心理学の場合は、後述するように、「私は考える（Ich denke）」という命題を前提しそこからの推論によって魂についての認識を展開しようとするかぎり、それは、内感の対象の経験的観察による経験的心理学と異

なることは言うまでもない。

ところで、心理学と超越論的哲学との認識態度の相違に関して、このように明確な区別を与えてしまったからには、ことさら心理学についてのカントの見解についてこれ以上論じる必要がないようにも思われる。しかし、カントは超越論的哲学の展開に際して、その心理学からの厳密な区別を十分に自覚していたわけではなく、むしろその展開が心理学と密接不離に関わっており、そしてまたそのことが、カント哲学の諸々の術語の曖昧さの一因にもなっていることを思えば⁽²⁾、心理学についてのカントの思想をあらかじめ検討しておくことは、同時に超越論的哲学におけるさまざまな概念の多義性の解明のためにも必要かと思われる。そこで以下においては、カントの心理学観を、合理的心理学と経験的心理学に分けて吟味してみることにしよう。

まず合理的心理学は、「私は考える」という唯一の命題から、推論を通して内感の対象としての魂についての全教説を得ようとする。しかしこの推論が誤謬推理であることは、「超越論的弁証論」の「誤謬推理論」が示す通りである。「私は考える」という命題における自我は、あらゆる思惟に伴う無内容な表象であるから、それは実在的な実体として存在するのではなく、したがってこの自我に適用されるカテゴリーの諸規定は、カテゴリーの「経験的使用」(A402)ではなく、その越権的な「超越論的使用」(A403)にすぎない。合理的心理学の誤謬推理は次のごとくである。「[大前提] 主観としてしか思惟されえないものは、また主観としてしか実在せず、それゆえそれは、実体である。[小前提] ところで思惟する存在者は、単にそのような存在者としてのみ見られるならば、主観としてしか思惟されえない。〔結論〕 それゆえ思惟する存在者は、また主観としてのみ、すなわち実体としてのみ実在する」(B410f.)。この理性推理の大前提における主観としての存在者とは、客観一般に関係し、したがって「或る持続的な直観 (eine beharrliche Anschauung)」(B412)において与えられる存在者であるから、現実的に存在する実体である。ところが、小前提における思惟する存在者は、「私は考える」という純粹自己意識として、あらゆる思惟に伴う「単なる論理的機能」(B407)にすぎないから、決して現実に存在する実体ではない。それゆえ、この推理は大前提と小前提の間で媒概念多義の虚偽を犯していることになり、誤謬推理として批判される。「私は考える」という命題における思惟的自我が、直観において与えられる現象的自我ではないかぎり、単純性・人格同一性といった思惟的自我についての合理的心理学の諸規定は、客観的実在性をもちえず、単に論理的に可能な規定を意味するにすぎない。

このように合理的心理学が誤謬推理に基づくものであるということは、とりもなおさず、内感の対象についてのアプリアリな総合判断の可能性が否定されたことを意味する。しかしながら依然として、この内的対象についての経験的認識の可能性の余地は残されている。内感の対象を、推論によることなしに経験的観察によって探求しようとする経験的心理学を、カントは「内感の自然学 (Physiologie des inneren Sinnes)」とも呼んでいる。「もしわれわれがわれわれの思想の活動についての観察と、思惟する自己についてその観察から得られるところの自然法則とに助けを求めるならば、経験的心理学が生じるであろうが、この経験的心理学は一種の内感の自然学であろう」(B405)⁽³⁾。カントによると、内感の自然学としての経験的心理学と外感の対象の自然学としての「物体論 (Körperlehre)」(A381)はともに、経験的認識の獲得を目指すという点では共通する。しかしまた、前者には既述のように

アприオリな総合的認識が不可能であるのに対して、後者にはそれが可能であるという点では両者は相違する。なぜならば「外感に対する現象は、何か或る停止し立ち止まるものを持ち、そのものが変易する諸規定の根底にある基体を、したがって総合的概念を、すなわち空間と空間における現象の概念を与える」(A381)のに対して、内的直観の唯一の形式である時間は何らの立ち止まるものを含まず、そこにおいては絶えず変易する規定しか与えられないからである。

カントは、『自然科学の形而上学的原理』において、内感の自然学がアприオリな学にはなりえず単に主観的な観点からの記述的認識にとどまらざるをえない理由を三つあげている。すなわち、第一に、内的直観形式の時間は一次元であるから、内感現象やその規則には数学(幾何学)が適用されえない。第二に、内的観察によって所与の多様を分析したり結合したりできるのは、あくまでも思考上のことだけであり、それを実験的に行なうことは不可能である。第三に、他人の精神状態を外部から観察することはできず、また自己の精神状態を観察しようとする時には、その状態そのものが変化してしまう(IV471)。注意すべきことには、これら三つの理由の中には「心理学が学になりえないこと理由として、客観的判断が経験的自己については不可能であることとか、カテゴリー一般が心理学においては適用不可能であることなどがあげられているわけではない」⁽⁴⁾。つまり、内感の対象の認識は、外感の対象の認識と同様、超越論的統覚の綜合統一によって可能になるということが否定されているのではない。経験一般の可能性の最高原理である超越論的統覚が、個別的な特殊認識(例えば、内感の自然学)の可能性の根拠であることを妨げる何らの理由もない。言い換えれば、経験的心理学は、アポステリオリな認識にすぎないけれども、この心理学の可能性の根拠を形式の側面から問うという超越論的哲学の課題は、経験的心理学が成り立つ場面とは次元を異にして可能だということである。したがってこのことから、内感現象は、一方では経験的心理学の直接の対象となるが、他方では、超越論的哲学の立場からも重要な一契機となりうるものなのである。そして内感現象という同一の用語が、認識態度を異にする心理学と超越論的哲学との双方において用いられているという点にこそ、カント解釈の困難さが存するのである。それでは、経験的心理学の対象としての内感現象は、超越論的哲学の内部で問題とされる内感現象とどのように相違するのであろうか。

超越論的哲学における内感現象は、感性的直観において与えられた所与表象として、経験の可能性の諸制約との関係において問題化されるのに対して、経験的心理学における内感現象は、観察し記述されべき実在的な対象と見なされ、そのためにその対象については、既述のように、既に存在しているということが暗黙に前提されている。このように、経験的心理学は内感現象を経験的に観察しうる既存の対象として扱おうとするのに対して、超越論的哲学は、経験的心理学が内感現象について事実にあれこれ関わりあっているというその関わり方そのものについて、その可能性の根拠を問題化する。言い換えれば、超越論的哲学は、経験的心理学が得るところの経験的認識が真理であるための諸制約を認識主観の「認識の仕方」という観点から追究する。そして超越論的哲学における内感現象とは、このような超越論的な問題圏域においてその説明手段として要求されたものなのである。この場合の内感現象は、あらかじめ存在する一個の対象ではなくして諸表象の無秩序な集合にすぎず、そのためにそれは、綜合統一の能力である悟性によって規定されなければならない。経験の可

能性の諸制約としてのカテゴリーや直観形式が、実際的な経験や観察が行なわれている次元そのものに対する反省から生じた地平の構成契機であると解するならば、その反省的地平のために要求された内感現象もやはりその地平のための所与と見なされなければならないであろう。

しかしまた内感現象という同一の用語が、経験的心理学と超越論的哲学との双方において用いられているために、「経験的」な問題次元と「超越論的」な問題次元との異質性が曖昧になりがちであることも事実である。そのために、経験的心理学と超越論的哲学が、内感現象という用語を同次元で共有しているかのような錯覚に陥り、そのために、「経験的」次元と「超越論的」次元とが混同されやすいのも当然かもしれない。しかし以上の考察を踏まえることにより、両次元における内感現象が全く異なる意味をもつことは明白であろう。

ところで経験的心理学と超越論的哲学とにおける内感現象の意味の相違が解明されたとはいえ、超越論的哲学そのものの展開過程においてさえ内感（現象）という用語はさまざまな文脈において用いられ、その意味の明瞭化には多くの困難が伴っている。そこで次節では、本節における内感の二義性、すなわち「経験的」次元における内感と「超越論的」次元における内感との二義性について、さらに詳しく考察することにしよう。

第三節

超越論的統覚に必然的に与えられるのは、超越論の意味での内感、すなわち外的および内的な所与の表象の総括としての内感（Vgl. B194）であって、「経験的」認識態度における心理学的内感ではない。なぜならば、「心理学の体系においては、（われわれが注意深く区別するところの）内感と統覚の能力とを同一のものと称するのが常である」（B153）ために、そこにおいては内感と統覚の関わりを問題にすることができないからである。心理学的内感とは統覚と同一視されることから、経験的統覚と呼ばれることもある。「内的知覚におけるわれわれの状態の規定に関する自己自身の意識は、単に経験的なものにすぎず、常に変易的である。内的現象のこのような流れの中では停止し立ち止まるようないかなる自己もありえないので、そのような自己意識はふつう内感あるいは経験的統覚と名づけられる」（A107）⁽⁵⁾。心理学的内感とは、超越論の意味での内感とは違って、受容的であるとともにまた自ら表象を連合して経験的統一を形成する能力である。この経験的意味での内感とは、印象によって与えられた多様や再生された所与表象を総括して一つの表象に結合するところの一つの意識すなわち経験的統覚である。このことをカントは、意識の主観的統一あるいは経験的統一と呼ぶ。「それゆえ、表象の連合による意識の経験的統一は、それ自身現象に関係し、そして全く偶然的である」（B139f.）。また第一版の次の箇所における感官も心理学的内感を意味すると思われる。「諸感官は、われわれに印象を与えるばかりでなく、それらをまた結合さえもして対象の形像を作り上げると一般に考えられている」（A120Anm.）。心理学的内感による統一は、「アプリアリな認識の可能性の説明のためには何の役にもたたず、それゆえ超越論的哲学に属するのではなく心理学に属する」（B152）。

それに対して超越論的意味での内感とは、外感をも包括し、それゆえ感性において与えられた表象を、それが外的表象か内的表象かにかかわらず、総括している。「われわれの表象がどこに由来しようとも、……それらは心の変容として内感に属し、そしてそのようなものと

してわれわれのあらゆる認識は結局のところ内感の形式的条件すなわち時間に従っている」(A98f.)。この「超越論的」内感¹⁾は、感性的表象の総括ではあるが、しかし心理学における「経験的」内感のように、与えられた諸表象を連合法則に従って綜合するわけではない。「[[超越論的]]」内感²⁾は、直観の単なる形式〔時間〕を含むが、しかし直観における多様の結合をもたないから、したがってまたどんな一定の直観 (bestimmte Anschauung) をも含んではいない」(B154)。しかも、表象が綜合統一されなければ認識 (この場合は「一定の直観」) が成立しない。それゆえ認識の成立のためには、内感が、超越論的構想力および超越論的統覚の自発性によって規定される必要がある。したがって上記の引用につづいてカントは次のように語る。「一定の直観は、構想力の超越論的作用 (内感への悟性の綜合的影響) による内感の規定の意識によってのみ……可能である」(B154)。

心理学的内感³⁾は、経験的統覚として自ら表象の綜合を行なうが、その際その綜合的統一⁴⁾はあくまで「経験的」次元において成立するところの偶然的主観的統一にすぎない。この内感⁵⁾は、「経験的」認識の成立に関わることから、そこでの認識は偶然的であって、必然性と普遍妥当性とをもつことはできない。それに対して、認識が必然性と普遍妥当性とをもつためには、心理学的内感が表象を連合法則に従って主観的に統一しているところの「経験的」次元を越え出て、超越論的な反省によって構築される「超越論的」地平が開かれなければならない。このことは言い換えれば、超越論的意味での内感が統覚や構想力によって規定されることを通して初めて、必然性をもった認識が可能になるということである。心理学的内感が「経験的」次元において綜合(連合)をも行なうのに対して、「超越論的」内感⁶⁾は、それ自身では綜合の働きをもたず、「経験的」次元に対する超越論的反省において要請された所与表象の単なる総括に止まっている。

それでは、そのような多様の総括に対してどのようにして統一性が賦与され、認識が成立するのであろうか。それは、カントが、「超越論的」内感に対する悟性(統覚)の関係を次のように表現していることから窺知される。すなわち「内感を規定するのは、悟性と、直観の多様を結合する悟性の根源的能力とである」(B153)。「それゆえ悟性は、構想力の超越論的綜合という名の下に、その作用を受動的な主観へと及ぼす」(B153)。この受動的な主観 (passives Subjekt) とは、「超越論的」内感を意味する。しかもこの内感に関してカントはさらに次のように語る。「内感⁷⁾は、構想力の超越論的綜合によって触発される」(B153 f.)。つまりここにおいて留意すべきは、カントが、悟性による内感の規定に対して、「触発」という表現を用いているということである。ここでの触発は、明らかに、「感性論」におけるように、認識成立のための多様を感性的直観において与えるところの触発(外的触発)のことではない。内感が悟性によって触発されるとは、内感が直観的多様を受け取ることではなく、外的触発において既に与えられている多様が統覚の統一の下にもたらされるという意味である。つまり構想力と悟性⁸⁾とによる内感の内的触発は、内感形式への超越論的統覚の自発的な関わりが、「一定の直観」を可能にする根拠だということの意味している。それゆえ内的触発は、認識一般の可能性にとって、つまり現象的自己の認識の可能性のためばかりではなく、外的世界の認識の可能性のためにとってさえも必然的なものなのである⁹⁾。多様を与える外的触発を質料的触発と呼べるとすれば、超越論的構想力や統覚による内的触発は形式的触発ということになる。「純粹自己意識の触発は、あらゆる結合の源泉である純

粹自己意識の形式的機能を意味する」⁽⁷⁾。そして質料的触発と形式的触発との協同こそが経験一般を可能にするものであるというのが、カントの認識論の考え方なのである。

第四節

以上のように、カントは、悟性と「超越論的」内感との関わり方を内的触発という思想によって展開しながら、また他方では、内感のパラドックスという事態に言及している。悟性の、内感に対する形式的触発について論じることと、内感のパラドックスについて述べることは、どのような関連にあるのだろうか。この問題は実のところ、超越論的観念論と経験的実在論との関わりというカント哲学の根本問題へとつながってゆく。

「しかしながら思惟する自我は、自分自身を直観する自我とは区別される……にもかかわらず、後者の自我と同一の主観として同じものであるというのはどうしてなのか」(B155)。同一の主観が、一方では自発的に思惟する主観すなわち超越論的自我であり、他方では自分自身を直観する経験的自我であるというこのパラドックスをどのように考えたらよいのであろうか。

超越論的統覚による内感の触発のみが論じられる問題圏域においては、前節で述べたように、内感において直観される自我とは、「超越論的」規定としての内感、つまり諸表象の単なる総括としての内感と解することができ、そのために、その場合にはパラドックスなるものは生じてはこない。なぜならば「超越論的」地平に定位するかぎり、「超越論的」内感は、超越論的統覚によって規定されそうして超越論的統覚の作用の中へと取り込まれることになるからである。したがってここには、内感と統覚との対立的矛盾はそもそも存しなくなる。「超越論的」内感と統覚とのこのような関係は、経験一般の可能性の探求という超越論的哲学の問題次元にのみ立脚した考え方に止まっている。

それゆえ、カントが自我のパラドックスを指摘する際には、彼はこのような「超越論的」問題次元のみから語っているのではないと思われる。カントがパラドックスをあくまでパラドックスとして認めようとしている時には、彼は、「経験的」規定としての内感の自我（これは超越論的規定としての内感の自我ではない）と超越論的統覚の自我とが、同一の自我であることを主張しようとしていると解しうる。「経験的」規定としての経験的自我は、超越論的統覚の規定作用によって規定されてしまうところの、「超越論的」規定としての内感の自我ではなく、経験的事実的な世界の中に既に存在しているところの自我である。そして「経験的」次元におけるこの自我を、同時に、経験の可能性という「超越論的」次元において働くところの「思惟する自我」と同一だと見なすところにこそ、パラドックスがパラドックスとして有意味な仕方でも成立しうるのである。同一の自我がこのような二面性を自らのうちに含むということは、同一の自我が「経験的」次元と「超越論的」次元との双方に同時に参加しているということである。カントが内感のパラドックスと表現したのはまさにこのような事態にはかならない。

したがって内感のパラドックスという事態は、単に、同一の自我が超越論的自我と経験的自我という二つの顔をもつということを剔出しているのみならず、むしろより根本的には、超越論的哲学によって「超越論的」地平が開かれるということは、開かれたその地平が「経験的」次元を飛び越えて砂上に楼閣を構築するという事柄ではなく、「超越論的」次元

が絶えず「経験的」次元との不可分の関係の中に巻き込まれ、次元を異にするこの両次元がなおかつなんらかの共通の基盤に立たざるをえないというパラドクシカルな事態を意味しているのである。

註

カントの著作からの引用は、『純粹理性批判』に関しては、慣例に従い、その第一版をA、第二版をBとしてその頁数を本文中に記す。それ以外の著作については、アカデミー版カント全集を使用しその巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で示す。なおカントからの引用文中〔 〕内および傍点はすべて筆者によるものである。

(1) 超越論的哲学における「存在と認識の関係」に関する筆者の見解については、次の拙稿を参照して頂きたい。

「カントにおける超越論的観念論の構造と展開」, 日本哲学会編『哲學』, 第35号, 1985

(2) この点については特に、『批判』第一版の「演繹論」が第二版において大幅に書き換えられたという事情を考慮に入れる必要がある。

(3) ここでの経験的心理学とは、『人間学』その他で言及されるところの、心身結合体としての人間の心理に関わる〈経験的心理学〉とは区別されるものであろう。つまり、ここでの経験的心理学は、外感ないし外的対象からは孤立したものと見なされるかぎりでの内感現象に関わる認識のことにすぎない。なぜならば、心身結合体における人間心理の場合には、外的対象との関連において、すなわち何か或る立ち止まるものとの関連において観察されることができるからである。『人間学』以外にも、カントは、心身結合体としての人間の心理的状态や行為などについての観察から得られる認識としての〈経験的心理学〉について語っている。例えば『形而上学講義』においては、「人間としての自我と知性 (Intelligenz) としての自我」(Immanuel Kants Vorlesungen über die Metaphysik, Hrsg. von Pöhlitz, 1821, S. 131) という二通りの自我を区別し、「人間としての自我は内感および外感の対象である。知性としての自我は内感のみの対象である」(ibid.)と述べて、「人間としての自我」が単に内感の対象であるのみならず外感の対象にもなりうることを認めている。また『批判』の叙述の中にさえも、同様の内容が看取される箇所がある。「生存中の魂の持続性は、(人間としての) 思惟する存在者が同時に外感の対象でもあるということによって、それ自身で自明である」(B415)。

以上のことからわかるように、経験的心理学に対するカントの考え方には、確定しがたい動揺が見られるのも事実である。

(4) A. C. Ewing: *Kant's Treatment of Causality*, 1924, p. 135

Vgl. N. K. Smith: *A Commentary to Kant's "Critique of Pure Reason"*, 1923, p. 312, note 2

(5) 内感を経験的統覚と同一視する例は、『人間学』(VII134Anm.) にも見られる。

(6) Vgl. H. J. Paton: *Kant's Metaphysic of Experience*, 1970, Vol. II, p. 388

(7) H. Jansohn: *Kants Lehre von der Subjektivität*, 1969, S. 184